

荒川修作の「意味のメカニズム」を解読する ～ 天命反転という身体技法のもつ希望 ～

得丸公明(衛星システム・エンジニア)

〒158-0081 東京都世田谷区深沢 2-6-15 E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

あらまし 筆者は、地球環境問題の深刻化に悩んだ末、人類と文明の起源を探求し始め、音声言語のデジタル化こそがヒトとヒト以外の動物を分け隔てることに気づいた。言葉の意味とは、個人が体験する五官の感覚記憶と、生得的論理回路が行なう二元演算の真偽値の記憶を体系化したものである。デジタル言語学はここで荒川修作の「意味のメカニズム」と接点をもつ。意味を生み出す意識の発生・形成過程を身体技法化した「天命反転」には、ヒトを現代文明の閉塞状況から解放する契機がある。

キーワード 荒川修作, 意味のメカニズム, 意識の発生メカニズム, 天命反転, デジタル言語学, 地球環境問題

An Interpretation of "The Mechanism of Meaning" by ARAKAWA+GINS - A Hope in Body Techniques of Reversible Destiny -

Kimiaki Tokumaru (Satellite System Engineer)

2-6-15 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-0081 Japan E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

Abstract Having been preoccupied with the seriousness of the Global Environmental Problems, the author started to investigate the origin of modern human and the Civilization. He realized that the only difference between humans and non-human animals is the digital characteristics of human language. In digital linguistics, the meanings of words are structured sensory and logical memories. The Mechanism of Meaning of ARAKAWA deals with the generation and formation of consciousness, which yields meanings. The author interprets the Mechanism of Meaning and the body techniques of Reversible Destiny, which have a possibility to redirect and emancipate humans from cul-de-sac of modern civilization.

Keyword ARAKAWA, Mechanism of Meaning, generation mechanism of consciousness, Reversible Destiny, digital linguistics, global environmental problems

1. まえがき：坐禅・公案・現代芸術

聴覚能力はあるのに言葉の聞き取りができない失語症や、発声能力はあるのに言葉を正しく発せられない失語症の研究成果は、運動性言語野(ブロカ野)と聴覚性言語野(ウェルニッケ野)の発見をもたらし、脳内の言語機能の局在性や母語音素処理のメカニズムを説明するのに役立った。

同様に、言語表現の論理性や言語そのものを否定する禅仏教の坐禅や公案、見るからにナンセンスな現代芸術作品も、意識の論理構造や生成メカニズムを説明するのに役立つであろう。また抽象概念や細分化された符号体系などヒトに固有の言語機能と、喜怒哀楽の感情や論理的思考など他の哺乳類と共通の意識基盤を峻別するのに役立つだろう。

1.1. 坐禅と公案

デジタル言語学では、言葉の意味は個人の記憶で

ある。それを前提に禅や公案について考えてみる。どこまで的を射ているかはなはだ心もとないが。

坐禅の際、木や石になったつもりで坐れ、思考を止めよと指導される。五官から入ってくる現今の事実は受け入れるが、概念作用によって言葉と結びつけられる過去の記憶は呼び覚ますなということだろう。

言葉で世界を表すのは、過去の経験や知識によって現在を理解することである。現在は過去と似て非なる可能性がある。言葉を捨て、五官を研ぎ澄まして、全身全霊を今の状況に対峙させよ。そうすれば必要な言葉や行動が自然に生まれる。これが禅の思想だ。

一方、公案は、たとえば「父母未生以前、本来の面目」(両親が生まれる前に、お前はどこにいたのだ)というナンセンス(非論理的)な問いを投げつけられる。この非論理を拒否するのでもなく、誰かの言葉を借りてくるのでもなく、自分の記憶の想起を止め、記憶のブール演算である思考を止めて、問いの非論理性に意

識を震わせながら七転八倒してもがき苦しむ。すると、言葉は単なる記号の羅列にすぎず、表現型である言葉はどうでもよくなる。言葉を捨て、言葉以前の地平に安住して、淡々黙々と生活するようになる。(これが有名な「香巖撃竹」の智閑和尚の心境ではなかったか。)

1.2. 現代芸術作品との付き合い方

現代芸術は禅に近い。そもそも作品をオブジェ (objet, もの) と呼ぶのは、芸術性を否定して、たまたまそこにある物体に過ぎないという強烈な自己否定である。

芸術作品だと思えば作家の名前に圧倒されて、心は動いていないのに感極まることもある。見る行為が自己目的化して、その先に進むことができない。

現代芸術は一般に、常軌を逸した場違いで奇抜な造形によって、常識や通念にしばられている我々の思考をもみほぐそうとする。非日常を前にして、見るものは居心地の悪さや違和感を覚える。その違和感を大切にして、丁寧に意識の上に手繰り寄せると、意味のメカニズムの一部を自覚できる。

見る者とオブジェは、一対一の対等の関係を築く。見る者は作品を言葉で理解しようとしてはならない。言葉はすべて過去の記憶に結びついている。言葉以前のものをまず感じ取ってから、それに最適な表現を探す必要がある。過去の体験や一般常識から自分の意識を解放し、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五官をフルに使って心の中に作品を招き入れ、言葉が熟成するのを待たなければならない。

例えば、M.デュシャンに「泉」という作品がある。小便器(朝顔)を横にしておいただけの作品である。これを見て、小便器だと思っただけの作品である。これを見て、小便器だと思っただけの作品である。「なんだろう。なつかしい。どこかで見たぞ。トイレにあった。でも臭くない。白いきれいな陶器だ。水はどこからも流れてこないし、流れ落ちる先もない。これはおしこのためじゃない。すべすべで気持ちいい。タバコの匂いがするぞ。灰皿に使っていいのか。では葉巻でも吸ってみようか」といった具合に、記憶を停止して、ひたすら目の前の作品と対話するのだ。

2. アラカワとの再会：意識の発生メカニズム

言葉による理解は無意味だと言ってしまった後で、どうすればアラカワを表現できるだろうか。

作品を見てもらう、体験してもらうのが一番だ。レオナルド・ダ・ヴィンチに匹敵する芸術家・科学者・思想家であることを感じるだろう。どうしようもなく破壊的・破滅的な消費と使い捨ての生き方がもてはやされる現代に、次なる文明の準備のために芸術と科

学と思想を統合して、人類に「天命反転」という身体技法を用意したのがアラカワである。東日本大地震とその後の原発事故によって、現代文明の終焉が近づいたことを実感した人々は「天命反転」をより身近に感じるだろう。

筆者は新聞の文化欄で「養老天命反転地」の完成を知り、そのときはじめてアラカワの名前も知った。以後、岡山県奈義町にある「遍在の場・奈義の龍安寺・心」、東京都三鷹市にある「三鷹天命反転住宅 ヘレン・ケラーのために」などの作品を体験した。

筆者は2007年4月に最古の現生人類遺跡である南アフリカ共和国・クラシーズ河口洞窟を訪問した後、同年8月から断続的に5週間倉富和子さんのご厚意によって三鷹天命反転住宅の一室に住まわせていただき、人類と言語の誕生に洞窟がどんな影響を与えたのかについていくつもヒントを得ることができた。

その後、言語の起源とメカニズムに関する筆者の考察は、デジタル言語学として、デジタル信号とデジタル符号化メカニズムについてさまざまな検討を行ない、2009年10月以来、情報処理学会の音声言語処理、自然言語、電子情報通信学会の思考と言語、音声、インターネット・アーキテクチャ、パターン認識とメディア理解、人工知能学会の知識データベース研究会などの場を借りて発表を続けている。

デジタル言語学において、言葉の意味は記憶である。五官が感じ取る記憶、記憶を生得的にもつ論理装置によって他の記憶と比較・演算し体系化して、より一般化・純粋化した記憶へと高めていく。このメカニズムは、ピアジェが簡単に触れている(1)。また、パブロフが犬を使って「条件反射」実験で示したことは、概念や概念体系、それらを構築する論理装置は、犬ももつということである(2)。

五官の感覚を一切ともなわない、純粋に抽象的な理論やシステム、たとえば「核融合」や「コンピュータ・ネットワーク」は、ヒトだけが認識できる。抽象概念は、純粋化され研ぎ澄まされた基本概念を、正しく論理的に積み重ね演算することによって、はじめて獲得できるものであり、ヴィゴツキーはそれを「真の概念」とよぶ(3)。ピアジェやヴィゴツキーら発達心理学者を除いて、概念や概念操作の研究は見当たらない。彼らも意識形成メカニズム自体を研究した形跡はない。

純粋抽象概念を正しく獲得し、正しく使うためには、基礎となる概念に至みや汚れや曖昧さがあってはならない。秤の分銅やメートル原器のように厳密で少しも間違いやごまかしの概念を獲得することが、抽象概念の獲得・使用にとって重要である。

アラカワが「意味のメカニズム」の中で表現しよう

とした「思考の或る瞬間、直射的に現われるもの」は、抽象概念の要求する緻密さと関係するように思えた。そこで、再びアラカワの仕事に立ち返って、「意味のメカニズム」を読んでみることにした。

3. アラカワの作品

アラカワは 1936 年に名古屋市で生まれ、1958-1961 年に東京で読売アンデパンダン展で活躍し、1961 年に渡米。以後ニューヨークを拠点に活動して 2010 年 5 月にニューヨークでひとまず現世での活動を終えた。

以下では、東野芳明のアラカワ論「荒川修作論のための覚え書」(4)と、アラカワ本人の言葉を紹介する(5)。それによって、図形絵画である「意味のメカニズム」の問題関心が、三次元立体物の斜面を利用した意識発生場に発展し、さらにそれが公園や展示室から居住空間へと発展していく連続性を感じ取れる。

3.1. 東野芳明「荒川修作論のための覚え書」より

3.1.1. 渡米前のアラカワ

まだニューヨークへ発つ前、アラカワは東京で、とてつもない失語症をかかえこんで、ころげまわっていた。(略)あるパーティーで、突然、アラカワが、床を両手で叩きながら、言葉にならない音声を発しつづけたのもこの頃である。

いまでも忘れられない、ひとつのイヴェント、あるいは反イヴェント。某大学の芸術祭から「操行ゼロ」という題の催しの招待状をもらった。会場に入ろうとすると、マッチやライターをすべて取りあげられ、懐中電灯で暗闇の部屋に通され、木の梯子を上り、坐せられる。全くの闇。まわりにほかの観客がいるのが気配で分るだけ。なにひとつ起らない。いくら待っても、ただ闇と沈黙がつづくだけである。瞳孔は開きっぱなしだが、ほとんど何も見えない。しまいに観客がパニック状態になる。誰かが、かくし持ったマッチをつけて、日常の意識が驟雨のように返ってきたときの安堵感。見ると梯子はとりはずされている。われ勝ちに下にとび降りたばかりの足許に、うずくまったまま動かない肉体がひとつ。アラカワは、朝から、この全くの闇の中で、仮死体を演じつづけていたのだった。真昼の校庭にとび出したときの、空虚な爽やかさ！(略)

あの当時、アラカワは、箱の作品を作りつづけていた。黒く塗った大きな箱の蓋を開けると、ふとん地の上に、綿をまぜたセメントの塊りが、ちょうど、あのイヴェントのときの仮死体のように、ころがっている……そこには、死んだ胎児めいたうす気味悪さと、どこか村芝居の怪談の書割めいた滑稽さとが

同居していた(4)。

3.1.2. 意味のメカニズム

アラカワはこのシリーズの一切を 1970 年のヴェネチア・ビエンナーレの日本館ではじめて発表した。それは、翌年、まず、ドイツ語版でミュンヘンのブルックマン社からローレンス・アロウェイの文章(独訳)と共に一冊の本となって発行された。

その英語版は 1979 年に出され、序文でアラカワとマドリン・ギンズはこう語る。

「……死とは古風なものである。随分奇妙なことだが、わたしたちはこんな風に考えるようになっていた。本質的にいって、『与えられたもの』からこのような変化、これほど根本的な特質がいまだに確実に立証されていないかぎり、人間の条件は歴史以前のままである。

もし思想とは何ものかを成し遂げるためのものだとすれば、それはまさにこのことのためであった。しかもなぜ歴史はこんなに緩慢だったのだろうか？そこには、この問題が心に描かれるときの仕方に何か間違いがあったのだろうか？たとえばの話だが、もしも考えることが思想のなかで路をふみ違えて無効になってしまっていたのだとしたら？いずれにしろ、思考のある瞬間、直射的に現われるものは何なのだろうか？こうした滑稽な図の幾つかを見直してみよう、とわたしたちは決心したのである。そこに起るもの、または何か知ら「考え抜かれる」ときにともなう諸要素についての、もっとも基礎的な要約ですらまだ存在していなかった。こうした契機を幾つかをわたしたちで図解してみてもよいではないか、わたしたちはそう思ったのである。(略)

意味とは或るものを――何であれ――考え抜こうとする欲望なのだと考えられるかもしれないのだ。まだ完全に知られないものに立ち込めている霧から、意味を解こうとする意志、ノンセンスの認識である。(略)

やがて未来の世代が構築するはずの思想のモデルや他の脱出路のために、わたしたちのユーモアが役だってくれることを願っている。」(滝口修造訳)(4)

3.2. 意識が発生する遍在の場

3.2.1. ≪遍在の場・奈義の龍安寺・心≫

人の意識の発生場に身を置くという点で、身体バランスが崩れるということは、無重力というよりは、身体の 2、3 の重心が外側にできる、ということです。

人の身体の重心は普通に立っているときは体の中、足の下にありますね。しかし、あなたの体が 30 度

、前か後ろに傾けば、重心は身体の中ではなく外側にできる。藤井さんは無重力といわれたが、それは無重力になったような感覚です。物語として、知識の領域で知っている無重力です。それがあの中に入った人の身体の中で瞬間的に芽生える。すると、今まで蓄えてきた知性、記憶、知覚というものが、1歳か2歳くらいの幼児と同じ状態になる。そうすると、もう私たちがつくり上げたあの環境をまともに見たり感じることができなくなってしまう。なぜなら身体のバランスを元に戻すことに一生懸命になるからです。藤井さんが1歳の赤ん坊に戻ってしまうわけです。そのときに芽生えた感覚こそ virgin(バージン)です。はじめてこの世界に出てきたときの感覚ですよ。道徳から自由であり、常識から自由であり、しかも記憶から自由である状態。ある永久の瞬間の場合、あの中に入ると私たちがつくり上げたものを何とか見よう、理解しようとするけれども、連続にならない。なにしろ身体のバランスが取れませんからね。上を見ても下を見ても、常に不連続の連続です。で、周りはどうかというと、まったく同じものがふたつ以上存在している環境。右を向いても左を向いても、上を向いても下を向いても、この瞬間に見たものが必ずまた見られるわけです。そのときにこそ、人間の意識というものが発生するのではないかと考えます。それは新しい発生です。つまり、藤井さんが今までもっていたものではなく、完全にバランスをなくしてしまい、ふたたびこの世にはじめて出てきた状態= virgin です。“どんなに繰り返しても virgin”です。いわゆる遍在の場です。その集合によって、はじめて共同の場ができるのではないか。それに何とかして器のようなものを与えれば、もうひとりの私たちが芽生える発生の拠点になるのではないかと・・・・・・。

「構築する」という行為は心の中にできるといえます。われわれのイメージの中に、あるいは肉体の中にも、そして「構築されつつある」ということを建築の原型とするならば、何が建築の原型であるかという、今私が息を吐いたり吸ったりしているその私の「身体」こそが建築の原型なのです(5)。

3.2.2. 養老天命反転地

人工的に大地と台地をつくり変え、それによって遍在の場というものが発生しうる、もっともよい環境をつくり上げる。私のいう「構築する」ということです。で、その原型をつくってやろうというのが岐阜のプロジェクトです。これは、新しいイベントをつくり上げる集合所であり、つまり駅のようなものです。あとは全体に複数の地平をつくり上げて、その異なった複数の地平によって、今までに与えられた自然にさよ

なら・・・・・・。(略)

岐阜のプロジェクトはいわばひとつの住宅建築です。それを引き伸ばせるだけ引き伸ばし、そして少し贅沢な普通の住宅建築の典型をつくってやろうと思ったわけです。それも思想的な住宅建築の典型。見たところ公園のようであり、遊園地のようであるけれど、本当は新聞広告に出ているような建売の住宅建築です。

そして、この次にくるものは、集合住宅ですよ。私が長い間考えているのは、どのようにして安い団地を「天命反転地」にできるかです。(略)

実際に私たちの肉体が出たり入ったりすることによってはじめて、完結はしませんが、完結に向かう方向性が出てくる。眺めたり考えたりして”知る”ことはそれほど大切なことではありません。多くのことを知ることはかえって危険ですね。なぜなら、他の発生や出来事から距離をつくり、ある限られた行動にしかデザインを感じなくなるからです。さらに、ひとりで使うのでは本当の価値が出てこない。大勢の人が使うほど、その遍在の場が明確になる。そういう意味で、街まではいかないけれども、集合住宅みたいなものから、いずれは都市計画を真剣にやりたいと考えています。(略) 私の場合はキャンパスと絵具が団地に変わることです(5)。

4. 意識の生まれるメカニズム

4.1. 意味のメカニズム

渡米直後の 1960 年代につくられた「意味のメカニズム」はアラカワの思想の根幹部分をなす(6)。

「ニューヨークに渡ってすぐ、この有機体は『生命』を外在化させるための身体だと思い、その可能性にスピードをつけるため、芸術、科学、哲学を総合に向け、『意味のメカニズム』をマドリン・ギンズと書き始めたのです。(略)世界のほとんどの思想家や哲学者は、いまだに言葉のみで考え進めていたから、死を超えるための行動にとりかかっていた」(7)。

「死を超える」という挑発的な言葉と「意味のメカニズム」はどう結びつくのか。結論を急がずに、まずはそのテーマのタイトルだけでも見てみよう。

テーマは 16 あり、：1 主観性の中性化、2 位置づけと移動、3 あいまいな地帯の提示、4 意味のエネルギー(生化学的、物理的、精神物理的諸相)、5 意味の諸段階、6 拡大と縮小 — 尺度の意味、7 意味の分裂、8 組み立て直し、9 反転性、10 意味のテクスチャー、11 意味の図形化、12 意味の感情、13 意味の論理、14 意味の記憶の構築、15 知性の意味、16 検討と自己批判、である。

それぞれのテーマのもとに 4~5 枚の図式絵画が用意

されている。「AをBと思え」や「A+B=C」など、数学的あるいは論理的な指示にしたがって、図に描かれていることと取っ組み合うことが予定されている。

しかし、全部で120枚以上ある「意味のメカニズム」のポスターをそれぞれじっくり読み解いていくのは大変である。美術館で見るには時間が足りないし、図録ではインパクトが弱い。筆者も1997年にニューヨークのグッゲンハイム・ソーホーで「意味のメカニズム」の展示を見たが、ほとんど素通りしたことを思い出す。

これらが我々の意識形成にどのように作用するのか。それぞれの作品はどのような現象を描こうとしたのか。今回は図録から解説を試みる。だが、その前にまず心の準備運動として、筆者がはじめて養老天命反転地を訪れたときの体験を思い出すことにする(8)。

4.2. 「極限で似るものの家」での体験

4.2.1. 使用法のある空間

筆者は1996年3月にはじめて養老天命反転地を訪れた。公園に入るなり、「極限で似るものの家」という建物に出会う。これはたくさんの壁がゆがんで入り組んだ迷路になった家で、いろいろな入り口から中に入ることができる。斜面になって安定感を欠く床の上に、ベッドや便器や冷蔵庫や机などの家具が多数配置されている。壁によって分断されている家具もある。

同様なつくりの家が上に逆さに覆い被さっており、その床を見上げると下と類似した配列でたくさんの家具が置かれている。

家は準備万端来園者を待ち受けているのに、来園者がそれに気づかないままずんずん中を歩き抜けて対話の機会を逃すことがないよう、荒川は「使用法」を用意し全来園者に配布している。(しかし、この使用法を読んで確かめながら歩いている人の姿はあまり見かけなかった。無邪気な子どもは使用法がなくても楽しく歩けるが、大人の場合はどうだろう。使用法なしだと、常識や記憶が邪魔をして、不要な言葉に振り回され、公園を訪れる意味が減るのではないだろうか。)

筆者自身、公園に入っただけで、「なんだこんな建物か。いったいどこが面白いのだろう。奇抜だけど、これくらいの奇抜さじゃあ驚かないよ」と思った。「平衡感覚が失われるというけれど、床が平衡じゃないから足が滑るだけだ。下からの重力を変えないかぎり、平衡は失っても、平衡感覚は失わないよ」とも思った。

この家の「使用法」は十分に非日常的である。「この家を自分の双子だと思」えとはまるで公案だ。

・ 何度か家を出たり入ったりし、その都度違った入り

口を通ること。

・ 自分と家とのはっきりした類似を見つけるようにすること。もしできなければ、この家を自分の双子だと思って歩くこと。

・ 今この家に住んでいるつもりで、または隣に住んでいるようなつもりで動き回ること。

・ 思わぬことが起こったら、そこで立ち止まり、二十秒ほどかけて(もっと考え尽くすために)よりよい姿勢をとること。

・ どんな角度から眺める時も、複数の地平線を使って見るようにすること、などである。

4.2.2. 「使用法」に従って歩く

常識の理解を越える家の中を、公案のような使用法に従って歩き回るとき、私たちは言葉を使わない。それが普通であり、それでいいと思う。何かがわかって、確かな言葉が浮かぶまで、言葉は必要ない。

筆者はひとり素直に「使用法」に従って、いろいろな入り口を使って、家に入出入りしてみた。するとだんだん家の中の様子がつかめてきた。最初はすべての場所が初体験だったのに、二度三度歩いているうちに、扉や床や壁や家具のそれぞれに馴染みがわいてきて、未知なるものが勝手知ったる既知の道に変わっていく。調度品の微妙な違い(個性)を見分けられるようになり、相互の位置関係が自分の意識に写し取られて、道に迷うとか、わけもわからずに歩くという気持ちが消えた。

多くの通路は吹きぬけになっていて、冷たい風が吹き込んできて手がかじかむ。風のこない一角を見つけてひと休みして、側にあるものに触れてみる。机やベッドに足を置いて目の位置を高くして、上の壁と下の壁の隙間から外を見ると、濃尾平野が広がっていた。

ベッドの色はやわらかいののに、素材は硬質のプラスチックでクッション性はない。電話の受話器は上がらずプッシュボタンも動かない。便器の蓋は開かず便座に坐れない。ガスレンジも冷蔵庫もすべて置かれている家具は本来の目的に使用するものではないとわかる。

自分よりも後からこの家の中に入ってくる来園者が、「行き止まりだ」、「何もない」と言いながら、そそくさと通り抜けていく。「そんなに急がなくてもいいのに」と、声をかけてあげたい気分になる。

来園者が「トイレがあった」、「電話だ」と叫ぶ声が奇異に聞こえて、「どこにも通じない電話機やおしっこのできない便器を、電話やトイレと呼んでもいいの」と内なる声がつぶやいた。

わずかに30分間、使用法にしたがって家の中をさま

よっただけで、私は言葉以前のものの存在に出会ってしまったのだろうか。一軒の家にそれだけの仕掛けが用意されていたとすれば、ものすごいことだと思う。

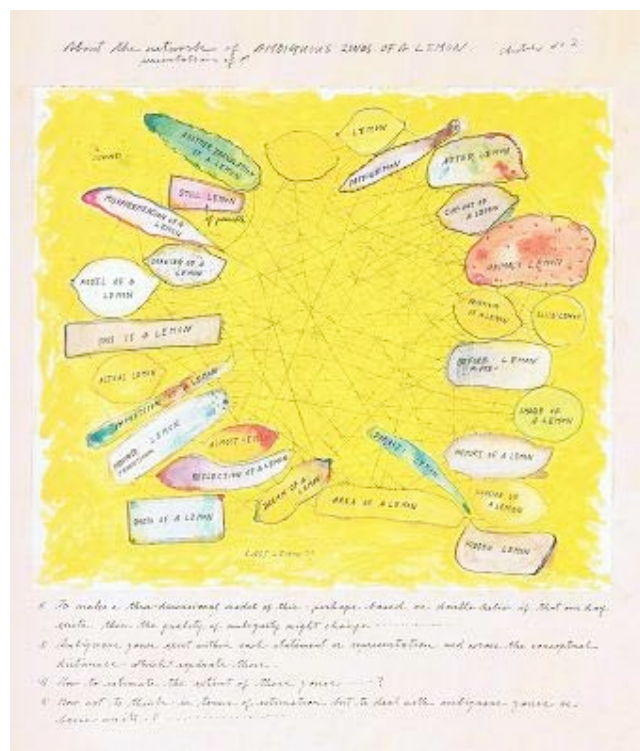
4.3. 意味は記憶のネットワーク

「意味のメカニズム」の連作も、あまり力まずに眺めることにする。素直に指示にしたがって、そこに描かれている世界と対話する気持ちで。

作品は100点以上あるので、今回は「3 あいまいな地帯の提示」の中から1枚紹介したい。

ピンク地の紙の上部に、タイトル「1 個のレモンにおけるあいまいな地帯のネットワーク / 提示」について。スケッチ No.2」とある。タイトルの下は四角く黄色に塗られていて、中央上部にツブツブな表皮のテクスチャーをもつレモンが、下地の黄色と同色で描かれている。これは唯一名前をもたないレモンであるが、その周りに描かれているさまざまな色と形の20数個のレモンはすべて名前をもつ。「レモンの別訳」「静かなレモン(可能なら)」「レモンの誤認」「レモンのドローイング」「レモンのモデル」「これはレモン」「現実のレモン」「レモンの印象」「動く・移動するレモン」「ほとんどレモン」「レモンの反映」「レモンの写真」「レモンの夢」「最後のレモン??」「レモンの領域」「隠れたレモン」「主題：レモン」「レモンの幻影」「レモンの記憶」「レモンのイメージ」「レモン以前あるいは前レモン」「レモンの絵」「薄切りレモン」「動物のレモン」「レモンの抜き型」「レモン以後」「過去のレモン」「レモン」(名前のない中央上部のレモンから、左回りに一周)が描かれている。すべてのレモンは相互に黒い線でネットワーク状に結ばれている。

下には注が4つある。1つ紹介すると、「※この立体モデルを作ること—いつか実現するとすれば、それは二重らせんを基にしたものになるだろう。そうすればあいまいさの質も変わるかもしれない。」



(図1, 1個のレモンのネットワーク, (6)p37)

名前のない中央は実在のレモンであろう。その右隣が「レモン」の理念型あるいは一般概念。その他は場や時や意識のあり方によって変わってくるレモンの記憶に基づいた色・形・表現が示され、相互にネットワークしている。「音」は言語表現されているが、匂いは全体の色調から感じ取れというのだろうか。このネットワークを立体化して、二重らせん構造にすると何がわるのだろうか。イエルネは神経細胞のネットワークが記憶を保持するといった(9)が、記憶は細胞核内のクロマチン構造に保存されているのだろうか。レモンひとつで、ここまで複雑で多様な記憶がネットワークするとすれば、我々の脳内における記憶のネットワークはどれほど複雑繊細なのだろうと思ってしまふ。

全体も部分も、言葉も現実も幻影も、イメージも写真も抜き型も、現在も過去も、およそレモンに関係するありとあらゆる記憶が一緒くたになって記憶され、それを神経細胞がネットワークして相互に結びつける。言葉の意味の広がりや深淵さ、神経の記憶の柔軟性と多様性、強靭さを感じる。

異種の記憶を無意識に結びつける神経細胞ネットワークは、無自覚に(しばしば寝ている間に)脳内で形成される。機械にこのような繊細な神経細胞ネットワークを教え込むのは相当難しいだろう。

こうしてたった一枚の絵画を読み解こうとするだけでも、アラカワの直観の鋭さと人間の意識のメカニズムの複雑さに感じ入る。

5. おわりに：

21 世紀に人類は未曾有の危機を迎えている。これは自分が何者であるのかということを忘れ、意識の発展可能性に無自覚に生きてきたからではないだろうか。

無心に世界を眺め、世界と一体化せよ。そこに愛が生まれる。我々の意識を動物本来の無邪気な存在に戻して自然との調和を回復させた後に、ヒトだけがもっている無限の可能性を伸ばしてみたらどうだね。

言葉以前の世界を実感し愛する技法が、アラカワが生涯かけてつくりあげた「天命反転」という修行法であり身体技法ではないか。

謝 辞

未熟な研究に発表の場を与えてくれた研究会に感謝する。「意味のメカニズム」の解説はまだ誰も試みていないようであるので、微力ながらこれからも続けていきたい。これまでの研究において、ギャラリー高木におられた中島祐子さんに大変お世話になりながら、ご期待に応えられないままであり、ご迷惑もおかけした。この場を借りてお詫びとお礼を申し上げたい。

文 献

- [1] J. Piaget 知能の心理学 みすず書房 1967
- [2] I.P. Pavlov 大脳半球の働きについて岩波 1975
- [3] L. Vygotsky Thought and Language MIT Press 1986
柴田義松訳 思考と言語, 明治図書出版, 1962
- [4] 東野芳明 荒川修作論のための覚え書, みずゑ 892 号, 1979 年 7 月, pp6-12
- [5] 荒川修作 x 藤井博巳 複数の地平に向かって, 新建築 69-6(1994 年 6 月) pp238-243
- [6] 荒川修作/マドリン・ギンズ 意味のメカニズム, 東京・リプロポート, 1988
- [7] 荒川修作 x 小林康夫, 身体の(再)誕生, 建築の場から, Ten Plus One, Vol.40(2005), pp169-183
- [8] 得丸 現代芸術より難解な現代世界をとく“カギ” World Plaza" No.47, Aug-Sept1996
- [9] 得丸 ヒト・デジタル言語の OSI 参照モデルによる解析 信学技報, IA2010-64, IA2010-77